

第一回 国語科問題文

二〇一七

〔一〕 つぎの文章を読んで、あとの問題に答えなさい。

〔A〕 「もっと勉強がしたいから、中学受験をさせてください。そう言ったのは、弓子、おまえだよな」

弓子は、父の声の強さに（あ）ながらも、視線はそらさなかった。むかいあつて立つ娘と父親のあいだには夕食が並んだテーブルがあり、イスにすわった弟の太二が箸を持ったままかたまつてしまっていた。父は三泊四日の海外出張から帰ってきたばかりなのだ。

太二は好物のトンカツにもほとんど箸をつけていなかった。母は、父が帰ってきてから一緒に食べると言うので、弓子はひとりでトンカツをほおばり、豆腐とワカメのみそ汁を飲み、ごはんをおかわりした。ポテトサラダとキャベツの千切りも残さず食べた。

父からは十分ほどこまに電話があり、受話器をとった母によると駅に着いたところだという。太二は事情を知っているらしく、とたんに箸が動かなくなった。弓子だって、父が帰ってきたらどうなるかはわかっているのに、なぜかおながすいてしかたがなかった。予想していたとおり、父は玄関にはいるなり、「弓子」と大声で呼んだ。

「おとうさん、おちついてください」

むかえに出た母が（い）ても、父の怒りはおさまる気配がなかった。足音を立ててダイニングルームにはいつてくると、父は旅行カバンを床にたたきつけ、かつて弓子が言ったことばをひきあいにして、娘をにらみつけてきた。

「私立も公立も関係ない。勉強する気がないなら、高校なんか行かずに働きに出ろ！」

父はバス停から家までの道を、怒りを（う）ながらも歩いてきたのだろう。弓子の頭に、夜道をぐいぐい歩く父の姿がうかんだ。

——最後に家族四人で土手を散歩したのは、いったい何年まえだろう？

弓子は、こんなに追いまれた状況にもかかわらず、むかしのことをおもいだしている自分がふしぎだった。母が父のうしろに立っているのは、a という無言の意思表示なのだろう。小学生のとき、弓子はよく家の手伝いをした。母が看護

師をしているため、洗濯物を取りこむのは弓子の役目だったし、夕方五時すぎに母が帰ってくると一緒に晩ごはんのしたくをした。太二の面倒も、どれだけ見たかわからない。たいへんだとおもうこともあったが、母に（ア）されるのがなによりうれしかった。ところが中学生になったとたん、弓子は家事をしなくなった。通学に片道一時間以上かかるうえに部活もあるため、平日は帰宅が午後七時をすぎるし、週末も予習や復習でいそがしい。母もそれがわかっているのに、たまにしか用を頼んでこなかったが、弓子はわざとらしくため息をついた。それなのに成績が落ちているというのだから、母にかばってもらえないのは当然だった。

弓子は、泣こうとおもえばすぐに泣きだせるとおもった。とりみだしたって、かまわない。それだけのbは、すでに胸いっぱいにつまっていた。

〔B〕 急ぎよ設定されたきのうの三者面談で、担任の先生が母に、三年生になってから成績が悪化の一途をたどっていると話した。このままでは高等部に進めない可能性さあると言われて、母は心底おどろき、深々と頭をさげた。

弓子はこんなに（イ）した母の姿をはじめて見た。細かなことにこだわらず、誰に対しても明るく接するのが母のスタイルだからだ。弓子は母がきいてこないのをいいことに、中間テストの結果を知らせていなかった。点数が悪いのは、けつして勉強についていけないからではなかった。一、二年生のときのように平均点を上回る自信はあったが、中間テストの数学で最後の問題をときおえた弓子はふとおもいついて、今書いたばかりの答えを消しゴムで消した。そのうえの答えも、そのまたうえの答えも消していった。とんでもないことをしているのはわかっていたが、自分でもおさえきれないおもいかられて、弓子は右手に持った消しゴムですべての解答を消した。そして、正解

ではない答えを書いていた。理科のテストでも、弓子は同じことをした。父や母に知られたらとおもうとおそろしかったが、してしまつたことはしかたがない。すると中間テストのあとに担任から呼ばれて、きびしく叱責された。期末テストでも同じような成績なら、保護者に学校に来てもらうと言われたのに、弓子は今回も数学や理科でわざとまちがった答えを書いたのだった。

「今日のことは、おとうさんに伝えます」

面談をおえて廊下に出たところで、母はそれだけを言った。家まで帰る電車のなかでも母はひと言も口をきかなかった。弓子は自分をと

んでもない親不孝者だとおもったが、母にあやまるきもちにはなれなかった。弓子自身、自分がいったいどうなってしまったのか、まるでわからずにいたからだ。いつも父が家に帰ってくるのは深夜0時すぎなので、弓子は父とほとんど顔をあわせていなかった。

弓子が中学受験をしたいと両親に伝えたのは、小学五年生と六年生のあいだの春休みだった。それまで通っていたテニススクールをやめて学習塾に通い、私立の中高一貫校を目ざしたいと言うと、父と母はおどろいて顔を見あわせた。

「これまで、おとうさんは運動会はもちろん、授業参観にもできるだけ行くようにしてきた。子どもたちも先生も実によくがんばっていて、このぶんなら第一中学校もなかなかいいふんいきなんじゃないかとおもっていたんだが、弓子はなにか不満があるのかい？」

父に真顔で心配されて、弓子はとまどった。中学受験をしようとおもったきつかけは、仲のいい女子のほとんどがそうするからだ。そこそこ成績がいい自分が地元の中学に進むのはカッコ悪い。父と母がそんな不純な動機で「ウー」するはずがないのもわかっていたので、弓子は自分の希望をなかなか言いだせずにいた。しかし四月から六年生になるのだから、一日でも早く学習塾にはいり、中学受験にむけた勉強を始めなければならぬ。そこで弓子はかねてより考えてきた理由をあげた。

一、将来は中学校か高校の国語の先生になりたいとおもっていて、四年制大学に進むつもりでいるので、中学生のうちからしっかり勉強したい。

二、弓子が通う第一小学校では毎年三割近くが中学受験をしている。第一中学校の学習レベルは第一小学校よりもさがってしまうわけ、できればより良い環境で勉強したい。

三、公立中学に進んでも、高校受験、大学受験と二回入学試験を突破しなければならぬ。それなら、中学受験と大学受験の二回にしたい。三つの理由を説明したあとに、「もっと勉強がしたいから、中学受験をさせてください」と言つて、弓子は頭をさげた。

「おまえのきもちがわかったが、少し考えさせてくれ」父はそう答え、母は、「志望校は決めてるの？」ときいてきた。

「うん、行きたい学校はいくつかある。でも、どのくらい学力が伸びるのかにもよるから」

「そうなの。ちょっと意外だったけど、がんばってごらんさい」

母のことばにうまくいきそうだとホッとしたが、弓子が中学受験をしようとする本当の理由は、「みんなよりも成績がいいうちに、できるだけいい学校にはいつておきたい」だった。そんな計算高いことを言ったら、父にも母にもあきれられてしまうだろう。弓子は国語や算数はもちろん、体育や図工の成績も「よくできる」で、先生や同級生たちから優等生と見られていた。テニスとピアノと英語は習っていたが学習塾には通っていないと言うとおどろかれて、「横山さんって、本当に頭がいいんだね」と男の子に感心されたときは得意になった。ただし、上には上がいるのもわかっていた。同級生に山本知紗という女の子がいて、ひとりだけ脳の性能がちがうというかんじだった。どの先生よりも賢いのではないかというほど頭の回転が速く、クラスメイトからもあつかいをされていた。

——知紗と比べたら、わたしの頭なんてまるで普通だ。

もうひとり、弓子がかなわないとおもっていたのは、弟の太二だった。保育園児のうちにはかわいいだけだったのに、小学一年生になって弓子と同じテニススクールにはいつてくると、太二はがぜん①をあらわしてきた。パワーはまるでなくせに、抜群の反射神経と勝負へのこだわりで、普通は追いつくはずのないボールに追いついてしまう。なにより太二は明るくて、見ているひとたちを味方につけるふしぎな魅力を持っていた。弓子だって運動神経には自信があったし、テニススクールにいる同年代の女子のなかでは強いほうだった。「弓ちゃん」と、コーチやおばさんたちから呼ばれてかわいがられていたのに、太二がはいってきて半年もすると「太二くんのおねえちゃん」と言われるようになったのがなにより悔しかった。しかも太二のほうでは、自分が人気者になっていることなど気にもとめず、ボールを追ってひたすらコートをかけまわっているのだ。練習がおわったあとも、ほかのひとたちのプレーをあきずに眺めている。

弓子が中学受験をしようと考えたのは、太二が絶対に来られない場所に行きたいからでもあった。中高一貫の女子校なら、太二はどうやってもはいれない。四つも年下の弟に対するコンプレックスをバネにして中学受験をするなどおかしい気もしたが、弓子はなんとしても地元の市立中学校には行きたくなかった。

「結論から言うと、中学受験に反対はしない」

父の言い方から、なにか条件がつきそうだとおもったので、弓子はすぐにはよろこばなかった。

「私立に行くなら、よくよく調べて、一番行きたいとおもう一校だけを受験しなさい。もしもそこに合格できなかったら、学区にある第一

中学校に通うんだ。むかしとはいろいろ事情がちがうだろうが、おとうさんもおかあさんも公立の中学校で勉強したし、世の中をわたっていくための力はじゅうぶんつくとおもっている」

きびしい条件をだされて、弓子は父をうらんだが、「わかりました」と返事をした。

さっそく手続きをして春休み中から学習塾に通いだすと、弓子の学力は急激に伸びた。弓子がかねてより憧れていたキリスト教系の中高一貫校を志望することにした。そう決めると弓子はがぜんやる気がわき、学校でも学習塾でも熱心に勉強した。努力はむくわれて、弓子は父との約束を守ってひとつだけ受験した志望校に合格した。小学校の先生たちも、塾の講師も、とてもよろこんでくれた。もちろん父と母も合格を祝ってくれたが、二人が本心では地元の第一中学校に通うほうがいいとおもっているのを、弓子は知っていた。

入学すると毎日礼拝があり、弓子もおごそかなきもちで祈りをささげた。クリスマスチャンになるつもりはなかったが、伝統ある学校の一員になったことが誇らしかった。開校当初からのセーラー服が有名で、弓子は毎晩念入りにブリーツスカートにアイロンをかけた。部活は英会話部にはいった。中等部だけでなく高等部の先輩たちとも仲良くなり、弓子は地元の中学校ではけっして味わえない、(a)でおだやかな学園生活に、(b)を得ていた。

ところが、弓子はしだいに居心地の悪さを感じるようになった。伝統校だし、帰国子女も少なくない。弓子だって母にきちんとしつけられてきたし、友だちとも普通につきあえていたが、なにかと育ってきた環境のちがいを意識せざるをえなかった。憧れて入学したものの、それは地元の同級生たちに対して優越感にひたりたかっただけではないのか。自分はこの学校にふさわしくないのではないか。ひけ目を感じているせいで、礼拝のあとでも、「ついていけないよねえ」と、友だちとこっそりグチを言いあってしまう。一種の息抜きだが、弓子はうしろめたさの意識にかられて、いてもたってもいられなくなることがあった。そうかといって熱心に祈りをささげたいわけでもない。英会話にしても、上達するにつれて、かえって自分には他人にかたれるほどの経験も意見もないのが(c)されて情けなくなった。

英会話部は毎年学園祭でミュージカルを上演する。連日汗ビツシヨリになって練習を積み、講堂での本番にのぞむ。満員の観客をまえにして、プレッシャーをはねのけて熱演するのだから、幕が下りたあとは部員たちが抱きあって涙にくれる。弓子も(c)にひたったが、その一方で、ここは自分がいるべき場所ではないのではないだろうかとの疑問が湧くのをおさえられなかった。

二年生まではどうにかこらえていたが、三年生になるとさらにやりきれなさがつのった。大学受験をみすえて、高等部に進むまえから勉強に没頭する子もいれば、部活動に熱中する子もいて、弓子は同級生たちの勢いに圧倒された。国語の先生になるという目標をあきらめてはいなかったが、このままではとても先生になどなれそうにない。

そんな弓子とは(d)に太二は絶好調だった。テニスの腕前をぐんぐんあげて、去年の秋には市民大会小学四年生の部で優勝した。五年生になった今年は六年生とも対等かそれ以上に戦っているとのこと、父と母もよく太二の試合の応援に行っていた。弓子も一度さそわれたが、いいかげんな返事をする、それきり声をかけてもらえなくなった。太二は当然のように地元の第一中学校に進むつもりでいて、将来の目標はテニスで世界一のプレーヤーになることだという。

弓子は、両親に自分のことも気にかけてほしかった。しかし、これまで学校についてきかれるたびにイヤな顔を見せてきたし、学園祭や体育祭にもこなくていいと言っておきながら、いままら悩みを聞いてほしいとは言えなかった。

——いったい、どこでまちがったのだろうか？ 父の言うとおり、地元の第一中学校に進んでおけばよかったのだろうか？ いや、それならそれで、やはり不満を抱えていたにちがいない。つまり、わたしは(c)。

そして、気がつくと、弓子は消しゴムで数学の解答を消していたのだった。

D 「おい、弓子。なんとか言ったらどうだい！」

父の大声にからだがふるえて、弓子はわれにかえった。父の怒りに、弓子は答えようがなかった。

——どうして太二はひとつのことにあんなにうちこめるのだろうか？ テニスのプロになるなんて九十九・九パーセント無理なのに、積み重ねた努力が無駄になるのがこわくないのだろうか？

弓子はずっと父にむけていた視線を弟に移した。太二は箸を持ったまま、心配そうな目でこっちを見ていた。まっくろに日焼けした顔にはあどけなさが残っているが、あごがしっかりして、肩幅も広くなつてと、たくましさを増している。

「ごめんね、太二。おなががすいているのに、食べるのをジャマしちゃって」

自分でもおもしろいがないことが口をつき、弓子はおわてて父のほうにむきなあった。父も意表をつかれたようだったが、きびしい表情はくずしていなかった。

———そういえば、わたしはもう何年もおとうさんに「d」と言っていない。いまここで、「おとうさん、d」と言ったら、「話をはぐらかすな」と怒られるだろうか？ 海外出張で疲れきっているはずなのに、おとうさんはわたしのせいですわることさえできずにいる。おかあさんも、おとうさんをはやく休ませてあげたいとおもっているはずだ。弓子は父と母へのもうしわけなきで胸がいっぱいになった。

「今まで育ててくれて、ありがとうございます」

そう言ってお辞儀をすると、弓子はおどろく父と母のそばを通りぬけて、玄関で靴をはいた。

どこに行くあてもなかったが、弓子は駅のほうにむかつてかけだした。どこで朝まですごせばいいのだろうか？ とにかく警察に補導されないようにしてはいけない。学校にはぜったいに迷惑をかけたくない。

駅が見えてくるとやたらとひとが多いのに気づいた。イヤな予感当たって、ハンドマイクで話す駅員の声が聞こえた。

「……上下線とも、復旧のめどは立っております。まことにもうしわけありませんが……」

弓子とまどつているあいだにも駅前にはひとが増えつづけて、しだいに身動きがとれなくなってきた。

「横山弓子さんよね？ 太二くんのおねえさんの」

すぐとなりの女性に言われて、弓子はおどろいて跳びあがりそうになった。

「わたしのこと、おぼえているかしら？」

「水野先生！」

反射的に大きな声が出てしまい、弓子はおわてて顔をふせた。

「うれしいわ、おぼえていてくれて。学校はどう？ 楽しい？」

太二の担任だった水野先生はやさしい笑顔で弓子を見つめた。小学校の職員室で先生方に合格の報告をしたときに、水野先生がことのほ

かよろこんでくれたのを弓子はおもいだした。

「とても楽しいです。仲のいい友だちも何人かいて」

とっさにとりつくろったものの、弓子のかえって悲しくなった。

「誰かと待ちあわせ？ でも、そんな感じでもないみたいね」

このままでは家出をしようとしていることを見ぬかれてしまうとおもったが、逃げだそうにも周囲はひとでいっぱいだった。

「太二くんは本当にいい子に育ってるわよね。おとうさんも、おかあさんも、お元気で。そうそう、去年の運動会ではおとうさんにお世話になったのよ。本当にすてきなおとうさんね。もちろん、おかあさんも」

———そうなのだ。水野先生が言うとおりの、おとうさんもおかあさんも本当にすばらしいひとなのだ。それなのに、わたしだけが……。

泣いてはいけないとおもっても、弓子は涙があふれてとまらなくなった。

「あら、たいへん。弓子さん、どうしたの？ わたしがなにかよいなことを言ったのかしら。弓子さん、おうちまで送っていくから、歩きながら話すのどうかしら。わたしで力になれるなら、いくらでも助けてあげるから」

弓子には、水野先生のもうしでを断るだけの気力もなかった。そして夜道を家へとむかいながら、中学受験をきっかけにして生じた両親との行きちがいを話した。さらに、水野先生にきかれるままに、理数系科目で悪い点数をとったのはわざとであることまでうちあけてしまった。

E

「もしもし、横山さんのお宅ですか？ 夜分にすみません。わたくしは第一小学校で教員をしております水野です。じつは、先ほど駅前で弓子さんにお会いしましてね。ええ、いままでいろいろお話をうかがっていたところなんです。そうでしたか。では、おとうさまに家にもどられるようにお伝えください。わたくしたちは、もうお宅のすぐまえまで来ております。ええ、角の街灯のところですよ」

水野先生がそう言ったかとおもうと、すぐに玄関のドアが開いて母が飛びだしてきた。

「先生、もうしわけありません。まずはおはいりになってください。弓子も、ほら」

母は大あわてで水野先生を家にひきいれると、「ちよつとすみません」と断って奥にむかった。父の携帯電話にかけて、はやく家に帰って

くるように言うのだろう。

水野先生の指示で、まずは父と母が並んですわった。つづいて両親とむかいあって弓子と太二がすわると、水野先生は長方形のテーブルの短い辺に移動して、立ったまま話した。

①「たんとうちよくにゆうにもうしあげますが、わたくしは弓子さんが学習意欲を失った一番の原因はおとうさまにあるとおもいます。勝手な推測で恐縮なんですが、おとうさまは中学から私立の学校に通うことに対して偏見をお持ちなのではありませんか？」

それは弓子もかねてよりおもってきたことだった。凶星だったらしく、父是水野先生に反論しなかった。水野先生は父と母を交互に見つめながら、さらに話をつづけた。

「弓子さんはこれまでとはちがう環境にひとりで飛びこんでいるんです。ご両親から支持されていないとおもったら、子どもが自分の力を伸ばせるわけがないじゃありませんか」

②弓子は、父がやりこめられているところをはじめて見た。しかし、だからといって、自分がテストでわざと悪い点数をとったことがせいとかされたとおもっていなかった。たしかに両親から認められていないのは苦しかったが、弓子も地元の公立中学校に対して偏見を持っていたのだから、父だけを一方的に責める気にはなれなかった。

「ところで、わたくしがどうしてこんなにも弓子さんの肩を持つのか、ふしぎにおもわれませんか？」
それまでの口調から一転して、水野先生が楽しそうな声で言った。

「それはわたくしが弓子さんの先輩だからです。わたくしもあのセーラー服を着て毎朝賛美歌をうたい、神様に祈りをささげていたんです」
まさか、そんなことは夢にもおもっていなかったの、弓子は声が出なかった。

「弓子さん、居心地が悪いだなんてとんでもない。全力でぶつかってごらんなさい。そうするうちに、あなたは母校というものがひとりの人間にとっていかに大切な場所なのかを理解するのです。さあ、これからあなたが切りひらく輝かしい未来を願って校歌をうたいましょう！」
そう言うとき水野先生が右手をふったので、弓子は背筋を伸ばして歌いだした。初めの二、三小節は父や母や太二の目が気になって口がひらかなかったが、校歌を歌うよろこびのほうがまさった。水野先生が低音のパートをうけもってくれて、弓子は澄んだ声で高らかに歌いつづけた。

F

「いやあ、まいった。いい歌が聴けたのは良かったが、ここまで圧倒されたのは初めてだ」
父はそう言って両腕を伸ばした。

「三泊四日の強行軍での出張よりも、うちに帰ってきてからの二時間のほうがしんどかった」
父の顔が自然にほころび、弓子もホッと息をついた。

「おとうさん」
いきなり言ったので、「なんだ、どうした」と父にげんな顔をされた。

「さつき、出張から帰ってきたときに言わなかったから」
弓子が言うと、父ががてんしてうなずいた。

「おう、そして、弓子にも、」
「だ。電車が動いていなくて、本当によかったな」
そこで父はふとおもいついたという顔で、「よし。明日、みんなで散歩に行こう」と言った。

「そうね、そうしましょう」

B母が応じて、太二もうれしそうにしている。久しぶりに家族四人で土手を歩けるのだとおもうと、弓子はみるみるからだに力がわいてきた。

④「もっと勉強がしたい。もっと、もっと、勉強がしたい。」
胸のうちでとなえながら、弓子は明日を待ち遠しくおもった。

〔二〕 つぎの文章を読んで、あとの問題に答えなさい。

彼らと出会ったのは、ペルーの砂漠地帯の街にある小さな劇場でした。出演者は六、七名ですが、内容はバラエティ豊かです。ペルーの民話を基にした、いたずら好きのちびっこ鬼が登場するコミカルな寸劇、民族楽器による音楽や力強いダンス、そしてジャグリングなどのパフォーマンス(演技)が矢継ぎ早に登場します。演じるのは一〇代の若者です。どの演目も「子どもの劇団」というレベルを越えて、パフォーマンスとして洗練されていました。ヨーロッパの芸術フェスティバルに何度も招かれているという実績にもうなずけます。

子どもたちの劇団「アレナ・イ・エステラス(砂とムシロ)」は、一九九二年にこのビジャ・エルサルバドル(救世主)の街で誕生しました。一六歳のときに劇団を創設した、リーダーのアナ・ソフィアは言います。

「自分で言うのもなんだけど、私たちの演劇やパフォーマンスは、とっても魅力的だと思うの。なぜこんな田舎にいる私たちがヨーロッパに呼ばれるのか考えたけど、ヨーロッパでは私たちのような劇が少なくなっただけだと思う。お金はあっても見た目は豪華でも、内容が薄いものばかり。逆に私たちのサーカスや演劇は素朴だけど、人の心を動かし豊かにする力があると思うの」

ツアーでやってきた一二〇名の訪問者は彼らのパフォーマンスに釘付けになりました。

彼らが活動するビジャ・エルサルバドルの街は、ペルーの首都リマから車で一時間のところにあります。この街の歴史は、苦難の連続でした。草木も生えない不毛の砂漠地帯だったこの土地で彼らは砂の上に柱を立てて、そこに垂らしたムシロを壁替わりにして暮らし始めました。劇団の「砂とムシロ」という名前も、ここからきています。

「私たちはただパフォーマンスをするだけじゃない。私は自分のことを、文化を広めるプロデューサー(製作者)だと思っているの」

ダンスや打楽器の演奏を汗だくでやっていたパメラ・ガモナル(二六歳)は、こう語ります。パメラが生まれ育ったのは、ビジャの街の中でも特に貧しい地域です。今では街のほとんどの地域で上下水道が整備されているのですが、彼女の地域にはありません。砂漠地帯なので昼と夜の気温差が激しく、寒さに震える夜もあります。二人の姉は幼い頃から働きづめでした。そうした姿を見続けてきたパメラは、自分たちが人生を歩みたいと考えていたのです。劇団に参加したのは一歳のとき。パメラは今、高校で生徒会長をしながら劇団員として活躍しています。毎日昼過ぎに学校が終わってから、夜の九時半まで練習します。また、海外公演がある前はさらに練習づけになります。

彼女がこの劇団の活動から学んだことはたくさんあります。

「劇団の先輩たちからのアドバイスはいつも大切にしているよ。たとえば、自分のことばかり考えるのではなく、困っている他人のことも考えること。そして、本当の「支援」は、自分の余ったものをあげるのではなく、その人が必要としているものを与えること。その意味では、貧しい私にもできることはあると思う。何もできないなんて思ったことはないの」

パメラがそう実感したのは、巡業で山間部のとても貧しい村を訪れたときのことでした。パメラは自分よりさらにきびしい暮らしをしている人たちがいることにショックを受けました。それでもそんな村人たち、とくに笑顔を失っていた子どもたちに、演劇やサーカスで笑顔を与えることができたことが、とてもうれしかったのです。

仲間と共に学び、助け合いながら成長していくパメラの姿を見て、パメラの通う学校では、教育の一環として演劇を取り入れるようになりました。卒業をひかえた彼女には、やりたいことがたくさんあります。

「私は子どもたちに芸術を教えて喜びや笑いを与えられる存在になりたいの。子どもたちの中には、自分に自信がなくて、何をしたらいいかわからない子も大勢いるから、この劇団で心のサポートもできたらいい」

劇団の誕生には、ビジャの街の歴史が深く関わっています。ここに人びとが暮らしはじめた当初、政府の支援など何もない状態でしたが住民は話し合いながら街づくりを行ないました。住民による街づくりは世界的な反響を呼び、一九八六年にはノーベル平和賞の候補にもなりました。

ところが、一九八〇年代後半から、ペルーの人びとを恐怖で震え上がらせていた武装グループのセンデロ・ルミノソが、街を支配しようとしています。軍や警察は腐敗していて、市民を守ってくれる人は誰もいませんでした。そして、センデロの暴力に反対した人びとが次々と暗殺されていきます。

住民組織のリーダーだったマリア・エレナもそのひとりです。彼女が最後にしていた活動は、『一杯のミルク』プロジェクトでした。誰もが怖くて外出できなかったときに、マリアは子どもがいる家庭にミルクを配ってまわりました。センデロの脅迫を拒み続けた彼女は、ついに銃撃を浴びてしまいます。マリアの死をきっかけに、人びとは暴力と立ち向かうようになりました。

「あのとき私もマリアのように、暴力に立ち向かうと決めたの」

アナたちは、まず顔をペイントして、太鼓をたたきながら通りに繰り出しました。そして、「怖くないからみんなで外に出て楽しもう」というメッセージを投げかけたのです。あちこちを回って子どもを巻き込んでいきました。喜ぶ子どもをしりめに、大人たちは冷やかでした。芸術なんて無駄なものだと思われるからです。誰からの支援もない貧しい子どもたちが、この活動を続けていくことはたいへんでした。それでもアナたちは収入を劇団の事務所や衣装代につき込んで活動を続けました。現在、「アレナ・イ・エステラス」の演劇のテーマは、伝統的な話から、今の若者の現状、スラムの貧困を扱うものなどさまざまです。アレナは人びとに、アートを通じて社会への意識を持つてほしいと思っています。

彼女たちのパフォーマンスは、人びとに笑顔と、貧困に立ち向かう勇気を与えました。一九九〇年代後半になると、そうした努力が海外の芸術家の目にとまり、今では毎年のようにヨーロッパの芸術フェスティバルに呼ばれています。国際的な団体からの支援も得られるようになり、一〇名ほどの中心メンバーに給料を支払えるようになりました。今やビジャの大人たちにとっても、劇団は欠かせない存在になっています。そして二〇〇八年、「アレナ・イ・エステラス」は、国から正式に芸術、文化を教える教育機関として認められました。有名になったアレナは、大都市で公演してもっとお金を稼ぐこともできます。それでもアナたちは今も、砂漠の街で学校を巡っています。

「ビジャの街は大きくなって基本的な設備はできたけど、それだけで人間らしく生きていけるわけじゃない。ビジャには映画館のような文化的な施設がほとんどないから、アレナを文化センターにしていきたいの」

二〇〇〇年代に入って、ペルーの人びとを苦しめた暴力の時代は終わりを告げました。しかし、貧困と犯罪、社会の不正といった問題は積み残されたままです。「アレナ・イ・エステラス」の子どもアーティストたちのチャレンジは、これからも続いていきます。

（ピースボート編「紛争、貧困、環境破壊をなくすために世界の子どもたちが語る20のヒント」より）

第一回 国語科問題

〔一〕 (一) (あ) (う) に入る最もふさわしいことばをつぎの語群から選び、解答らんにつながるように書きなさい。

さわめく かなしむ なだめる こらしめる たじろぐ たざらせる

(二) a にはどのような内容が入りますか。母の気持ちを考えて自分のことばで書きなさい。

(三) (へ) アーウに入る最もふさわしいことばをつぎの語群から選び、番号で書きなさい。

1 驚嘆 2 困惑 3 同情 4 納得 5 妥協 6 感謝

(四) b にはどのようなことばの組み合わせが入りますか。最もふさわしいことばをつぎの語群から選び、記号で書きなさい。

ア 後悔と憎しみ イ 混乱とあせり ウ 不安とさみしさ エ 孤独とさとり オ 屈辱とあきらめ

(五) A の場面で、弓子と太二の様子から二人の気持ちの違いを自分のことばで書きなさい。

(六) 線Aとありますが、弓子はなぜそうしたのですか。C の場面から分かる弓子の気持ちを

「家族」と「学校」の二点から考えて自分のことばで書きなさい。

(七) ア (ア) (ウ) に入る最もふさわしい二字の熟語をつぎの語群から一つずつ選び、漢字に直して書きなさい。

さかく じかく べっかく さっかく とうかく

(八) (一) (あ) (う) には、「的」か「感」のつくことばが入ります。つぎの語群から最もふさわしいことばを選んで漢字に直し、「的」か「感」をつけて三字の熟語で書きなさい。

まんぞく かんじよう りち ぎむ たっせい たいしろう

(九) c にはどのような内容が入りますか。「わたし」の気持ちを考えて、自分のことばで書きなさい。

(十) d には、すべて同じことばが入ります。ふさわしい七字のことばを考えて書きなさい。

(十一) A (F) の本文を、弓子が実際に経験した順番に並べかえなさい。

(十二) 線Bとありますが、この最後の弓子のことばには、どのような決意を感じますか。

今後の学校生活をどのように過ごしていこうと思っているのか、文章全体から考えて、自分のことばで書きなさい。

(十三) ①～④を漢字に直しなさい。必要なら送りがなも書きなさい。

〔二〕 (一) 線a、bは、どのような意味の言葉ですか。五字程度で分かりやすく書きなさい。

(二) 線①とありますが、それはなぜですか。その理由を文中から十六字で探し、はじめと終わりの三字を書きなさい。

(三) 線②とはどのような人ですか。文中から二十五字で探し、はじめと終わりの三字を書きなさい。

(四) この文章の内容についてつぎの1～6から正しいものを二つ選び、番号で書きなさい。

- 1 子どもたちの小さな試みに大人が力を貸すことでやっと文化が生まれるので、何事にもチャレンジは大切である。
- 2 芸術は日々の生活には直接つながらないが、伝統に学び考える力を育て人生の豊かさをもたらしてくれる。
- 3 人間らしく生きていくためには、よく話し合って武装グループに立ち向かえる施設をまっ先に整える必要がある。
- 4 貧困のために忘れられていた伝統演劇を復活させれば、必ず観光資源が生まれ援助を受けずに生活することができる。
- 5 大人が現実には振り回されているのに比べ、子どもたちは生きることを楽しむ力があり、社会を変えることができる。
- 6 芸術には人をつなげる力があるので、豊かな資源を持った国から物資を分けてもらうことができる。

○時間は五十分です。
○答えはすべて答案用紙に書きなさい。